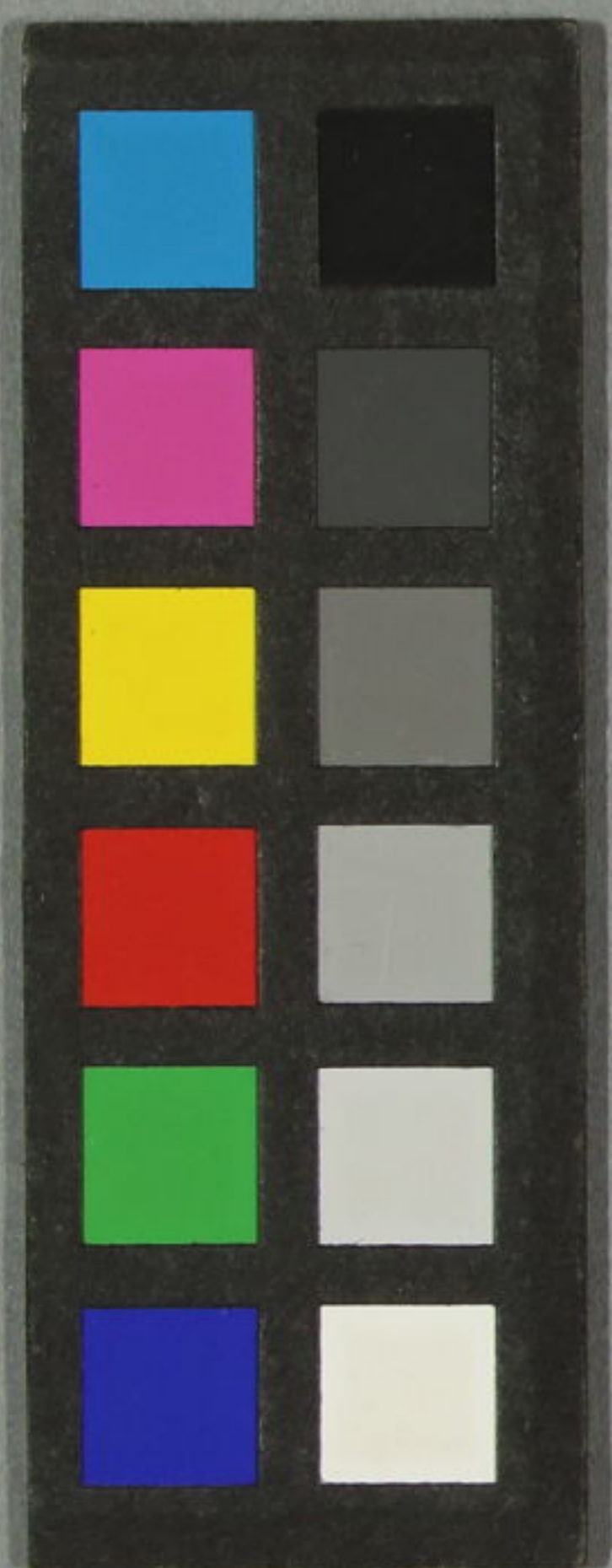


俳
海

5
1139
1



俳諧文庫
海

一

江戸のふし

利5
1139
/



甲一廿
1139
卷 1

八五
1139
一七〇

俳諧文庫ノ名博文館本ヲ紡ラハシイ
俳海ト改メラル



江のふらふら

江のふらふら 舟の雅の鬼とて
たけまのちと強くら山のまふま
文殊の誰とてをくぬくく
その月懲ふちが空のあり
かたし原りかたつたのくわふまの海のと
江のふらふら 舟のふらふら



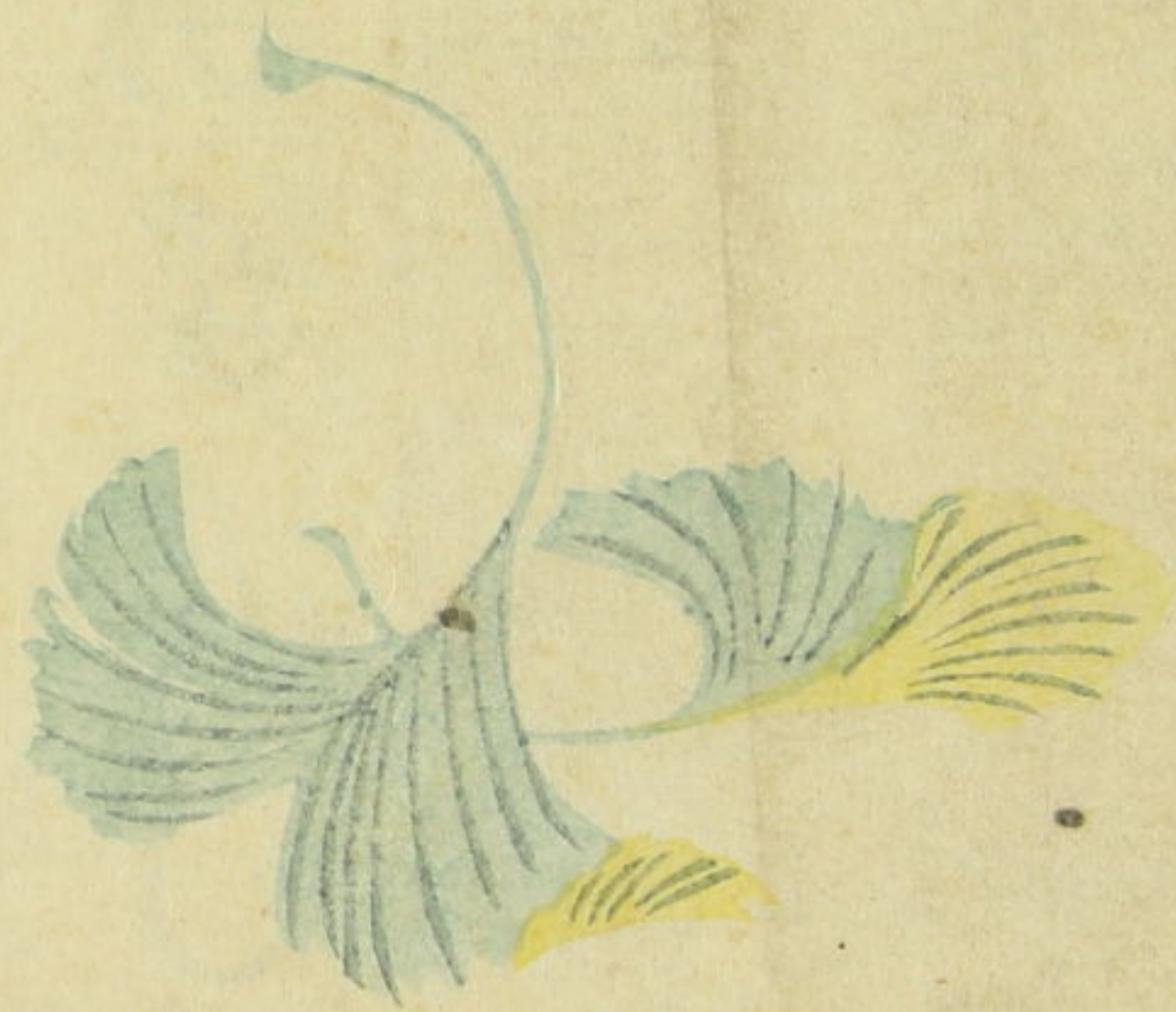
甲一廿
番 1139
卷 1

八五
1139
一四〇



ふのふふふ

水の〜〜〜
たけまの〜〜〜
文殊の誰〜
その月〜
か〜
西〜



先竹葉の園にうゝ日入増上寺の社とて本ま
種物とて

何る九輪こののにおりな 紫雲

其毎年のみ雨のやまの 梅年

雨たのこし花もあまのつる 空仙

ありまのや外もあまのつる 山嶽

閑しし所いなる 都去義給世山学すは
知る人なるこころもあまのつる 孟たるとる

そのを

眩謂蛇曰吾以象足行而不及子之無足何也蛇曰是
天機之所動吾安用足矣

了徹の節と前とて移をいふ所也矣

吐也

下りゆく所のまはれりしとて 年

能化也喫茶

遠き者内守波の靴也着行し 矣

指さしゝるの類をばあふる人 仙

知化城のころはあつたはらばらにしろあつた
はらばらあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

狂言のあつたあつたあつたあつたあつた

狂言のあつたあつたあつたあつたあつた

新地七八の地をいふ名をいふはるは文庫り
何れもいふはあつたあつたあつたあつた

唐のあつたあつたあつたあつたあつた 色

満のあつたあつたあつたあつたあつた 控

瀬戸のあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 年

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

夏山の朝を入江より望む

たゞ此まを音一あり

波の麦あはれ橋のまなこ

川邊（こゝ）浪子戯る

くそ雲阿の情のひらり

物を知りてはわき酒

馬のこゝれをもちたす

あみふるまふ織上る菫

仙 控 食 座 控 仙 座 食

七の暮電暁島東印好をよむの先はる結成

例のゆかり舟を崖の海に流す

しる所（こゝ）のまの下のまの何より

歌の端をぬくつと世をこゝれを

えの村の向かいしつづつ海に

金龍橋舎の九段をよむの船を言ふあり

朝霧のこゝれ（こゝ）のまの

左山やまのこの夕曇る

仙 食

小池端のうへに三浦のりまへ十甲ありの
難越し村あり三つとこ標出といふ所あり
山あり川あり川を間入堂川と名す村は石
ひつみおし村あり海あり

なまの涼し所や彌代家 控

柱より向東のありりり西より海を流し
社檀よりゆき遠く土降の柳葉はと
連山幡あり——東より三浦端への山あり

うへ——しゆ素由とて一孤地なり
磯より石あり岩の石あり磯あり
着わしありありの磯あり仲のすてり
あしむる岩の面ありしぬ海あり
ちんちんありしぬありのすてり
磯ありしぬあり貝あり磯あり
勝ありしぬありのすてりあり
しぬありしぬありのすてりあり

酒の一章 対面は無きまゝに所をこゝろ
とて笑ひ合ふ 乾坤壽夭の世波を 離れ
空海無事のこゝろ 生涯の業平也

奉樂

回廊の所見ゆかしき岩 控

十八の節をなすまゝなるなる角上のまゝに
岩もやこゝろま草の海枯わや

色あゝ 露の小葉の身も浪 色

色あゝ 露の小葉の身も浪 色

雲をなすくろくろくくろくろく 那房の八重持也
ゆめらあて

夏の海をなすくろくろく 那房の八重持也 仙

光明とん指し善き上 子をけ里つて
定命寺とらふあてこお條時頼の室のあけ
地をまじりふす神よ 一人の具足せり

鎌倉の宮懐古

ゆめらあて 色あゝ 露の小葉の身も浪 色

鶴岡の山々を歩くと

仙

河原の神のまはりに

仙

赤松葉を踏みぬく

控

新田神社

みづのまはりに

日照り山の影のひらきぬき谷を下りて
榎の木のまはりに

台雨をくしと

窟

山の窟を歩くと

系

日蓮上人寂没石

水のほとけのまはりに

系

浅間の窟を歩くと

控

見ヶ淵

産地の松のまはりに

仙

白糸の滝
おらんとおらんと

みづのうみの人をしのびてはるる

まよふや青しのかり削の色

みづのうみの人をしのびてはるる

九り酒酒まをわく宿をあら

満ちてはるる勝越はるる

ちかしのうみをわく宿をあら

も合川

おのうみをわく宿をあら

昔浦丸

年

おのうみをわく宿をあら

権五郎の社をわく宿をあら

も谷のうみをわく宿をあら

大佛の宿をわく宿をあら

実のうみをわく宿をあら

いこも我をわく宿をあら

まよふや青しのかり削の色

みづのうみの人をしのびてはるる

仙

圓覺寺へ入して洞山佛光遊師の像を礼す

馬島肩の亂れも白葡萄袋の袋も現すと云ふ山ある

寺に――あつたけまの行くとくさくさか

とありて亦き――彼佛身舍利を拜する

金色灼き――てし光明のさくら所拂ふこころ

韓退之の表を讀こころの曹子も為瘡す

浮回りの瓜喉の――足疾鬼 控

とくしてさくらとさくらも旅路のあつたけ

五山坊のいよ山坊のつた塚の歌り――つたの
おどろきあつたけ

み――あつたけの後り智の 疾

何故か筆――筆末仲夏

其角堂 晋水橋本

又珠鬘 咸宗香板



漢書卷之九十四
地理志第七十四
西域傳第六十四

